

隅田川続俤

幡随長兵衛精進俤板

其往昔恋江戸染

名作藝妓全集 十五

お染久松色読販

若木仇名草

三世相錦繡文章

版元

東京創元新社

全集伎舞歌作名

第15卷 江戸世話狂言集一

昭和四十四年十二月一日 発行

監修者

戸板 康二
利倉 幸一
河竹 登志夫
郡司 正勝
山本 二郎

発行所

株式
会社

東京創元新社

代表者

秋山 孝男

(162) 東京都新宿区新小川町一―十六
電話 (〇三) 二六八―八三三一
振替 東京 一五 六五

印刷・株式会社 金羊社
製本・株式会社 鈴木製本所
用紙・株式会社 富士川洋紙店
写真版・(株)興陽社、(株)方英社

万一、落丁乱丁がありましたらお取替えいたします。

目次 (名作歌舞伎全集第十五巻 江戸世話狂言集一)

隅田川続倅 (法界坊)	三
-------------------	---

幡随長兵衛精進俎板 (鈴ヶ森・俎の長兵衛) ... (装置図 釘町久磨次)	五
---	---

其往昔恋江戸染 (八百屋お七)	一七
-----------------------	----

お染久松色読販 (お染の七役)	一九
-----------------------	----

若木仇名草 (蘭蝶)	二七
------------------	----

三世相錦繡文章 (三世相)	三七
---------------------	----

解説 戸板康二

校訂について 山本二郎

郡司正勝

写真と資料提供―演劇博物館、演劇出版社、大谷図書館

梅村豊、鳥越文蔵

隅^{すみ}
 田^だ
 川^{がわ}
 続^{ごにちの}
 俤^{おもかげ}
 (法界坊^{ほうかいぼう})



隅田川続俳

戸板 康二

「隅田川続俳」はスミダガワゴニチノオモカゲというめずらしい訓である。俗に「法界坊」といっている狂言で、作者は奈河七五三助、天明四年五月十三日初日の大坂角の芝居に書き下された脚本である。

「振袖隅田川」「鐘淵劇故事」「隅田川故跡釣鐘」「一筆画墨田初雁」などの別名題もあるが、今日では、やはり原作の「隅田川続俳」を使う。「続俳」を「ごにちのおもかげ」としたのは、五字名題七字名題の原則に従う歌舞伎作者でなければ、思いつくわけもない無理な読み方だが、これは、能以来の「隅田川」の吉田の御家物の世界として、すでに登録されている舞台を借り、その「後日」の物語としたもので、破戒無慚の悪僧の中でもここまで徹底すればむしろ笑ってすましてしまうという程の、この極道の法界坊

は、安永四年二月江戸市村座に上演された「色模様青柳會我」の大日坊を、役柄としてさらに発展させたものである。

大日坊の芝居は初代桜田治助の作で、お染久松が出ている。春芝居の曾我物の縁で、景清の伯父の大日坊という役名を使ったのであるが、この時の浄瑠璃「垣衣恋字絵」に、大日坊と野分姫の二人の霊を一つにした怪しい葱売りが、お染と同じ姿であらわれ、妄執の思いを、振りであらわす趣向が成功した。その曲のために、法界坊は今日まで生き永らえたといわれるのである。

この大日坊の「双面」を常磐津で踊ったのは初代中村仲蔵で、作詞は初代河竹新七である。

偶然にも西洋の怪奇伝説ドッペルゲンゲルと共通した双面の着想は、すでに宝暦七年に常磐津の「二人浅間」というものがあり、同十二年にも富本の同じような舞踊劇があり、明和二年にはお花半七の世界の「二人お花」の常磐津がある。同じ姿の女が二人出て、それを見分けるために男と馴れそめのことを踊らせるということでは、この「二人お花」は、現行の「双面」に近いが、前記「垣衣恋字絵」の特色は、男女を葱売りにしたことであった。

天明四年四代目市川団蔵は大坂へ行って、自分が舞台で仲蔵の大日坊につきあってよく見ておいたこの芝居を、七

五三助に書き直して貰い、今度は主役の法界坊を演じて評判をとった。団蔵は寛政十年には再び江戸へかえって、九月の森田座で再演している。この時に、「双面月姿絵」として、現在行われている常磐津が出来たのである。

法界坊の脚本は何しろ奇抜で、底ぬけに明るい「悪」の跳梁する点が、大衆に歓迎され、その後もいろいろな俳優が演じている。時には、役名も、土手の道哲とか、聖天町の快了とか、浅草の願哲とかいうことがあったようだが、脚本の運びは変わらない。つまり歌舞伎十八番の「暫」などと同じく、役名は問題ではないのである。はじめの着想は、喜劇化した「清玄」ということだったらしく、清水清玄の役名を使うことさえあったのである。

特に文化五年五月に三代目坂東三津五郎の演じた大目坊は、世界を曾我にしたもので、これがどうやら安永の「青柳曾我」に一番近い、原始的な脚本ではないかと推定されている。

「手前味噌」によれば、初代仲蔵は一度「道成寺」がおどりたかった。ところが当時立役は「道成寺」が出来なかったで、それに近いものをと初代新七に望んで、鐘入までつけた葱売りの所作を書いてもらったのである。

この仲蔵の初演の時、四代目市川団蔵は、伊場の十蔵という役で、大目坊を殺し、舞台へ引き戻されて、刀をかつ

いで三度うしろヘトンボを切って返った。この好評で、ケレンの芸を江戸土産に帰坂した団蔵は、「隅田川続佛」で今度は主人公の法界坊に扮して、土手の場面に、傘をかついでうしろへ返って見せた。

奈河七五三助のこの「続佛」が以後「決定版」となり、悪僧の生前の凄惨きわまる行状が、死後解脱するまでの経過も性根として大体きまつたばかりか、法界坊の名も固定したのである。

法界坊については、三田村鳶魚翁の考証によれば、近江国坂田郡鳥居本村の上品寺じょうほんじという寺に同名の僧侶がいて、明和六年に江戸へ出て釣鐘を曳きながら寄附勸進を行い、安永五年に帰郷、文政十二年に七十九歳で遷化せんげしたとある。この法界坊が江戸の町で噂に上っていたのを、舞台上に写したのだというのが、まず動かないところだろう。ただしモデルにとって迷惑千万なのは、それが墮落僧として描き出されたことだ。

もっとも現代の吾々から見ると、法界坊は愛すべき人物である。色欲物欲、誰にでもある本能をもっともらしい顔で包みかくそうとする偽善者ではない。彼は永楽屋の娘おくみを慕っている。牛島大蔵に頼まれて松若丸や野分姫の詮議を手伝い、褒美の金を貰おうとする。鯉魚りぎょの一軸をかっぱらう。野分姫や永楽屋を惨殺する。大変な悪人だが、

その悪は稚氣に發し稚氣におわる。歌舞伎の「国崩し」の生白い敵役に比べれば、他愛のない、ピエロにすぎない。あの残酷さにもかかわらず、この作が今日まで伝わった理由は、法界坊に愛すべき点があるからだろうと思う。

法界坊は四代目以来、市川團藏の家の芸となり、その他三代目・四代目の中村歌右衛門、三代目坂東三津五郎、二代目関三十郎、市川小團次、四代目中村芝翫にとつても、法界坊は当たり芸であった。

近頃で法界坊を演じたのは、東京で六代目尾上菊五郎、初代中村吉右衛門、二代目市川猿之助、中村勘三郎、大阪で市川右團次、中村魁車等で、べつに喜劇俳優エノケン（榎本健一）もミュージカルにして、この役を当たり役にした。

菊五郎のは、弘化四年に河原崎座で四代目中村歌右衛門のつとめた時の台本を使っていた。本巻収録のが大体その時の本で、これには元来三囲土手の穴掘りのくだりがない。一方吉右衛門や猿之助は、穴掘りを面白く見せる。菊五郎と、この三人は、やり方もそれぞれがうが、各自特色をもっている。

演出からいうと、法界坊以外は、役柄が類型通りで、特にいうこともない。要助じつは吉田の松若と娘のおくみは、久松とお染でも一向かまわなしいし、大坂屋源右衛門、

悪手代の長九郎、道具屋甚三、野分姫に奴の五百平、どれも歌舞伎狂言にしじゅう出て来るタイプである。

その中で長九郎は、やや特殊だ。というのは、三枚目を得意にする文字通りの「番頭役者」が、代々工夫して、特異な型を考えているからである。初代吉右衛門一座の吉之丞は、浅尾奥山という故人の型で、大七の座敷の道具替りに、提灯の衣紋流しということを見せた。猫がからんだり、火傷をしたり、同じこの幕切れのやり方もいろいろあるが、いずれにしても、楽屋では物知りの古老格が、こういう役で、「自分の持ち場」を主張したわけである。

法界坊は、大七門前で、群衆を従えて釣鐘を曳いて出て来る花道の所から、すでに充分に發揮出来る役だ。思い切つて汚いつくりの扮装、かつらに禿を見せている。

奥座敷で、おくみが要助といひ争っているあいだに、鯉魚の一軸をすりかえた所なども、二人のうしろで悪ふざけをする人が多い。問題は、それが役の品の悪さにとどまるか、芸品の悪さにまでなるかだ。

長九郎がおくみを奥座敷で口説く「告げるとは胴欲な、告げる八方外ヶ浜」云々「えんこしなはれ、とどしなはれ胴体四つに折んなはれ」のセリフは、のちの白髭鳥居前で、やはり長九郎が、おくみを駕に押しこめ、駕の上から縄をかけて「しめたぞしめた、しめこのうさうさ」とい

い、駕を探す所で「駕は何処へ行た、太郎兵に次郎兵」というリズムカルなセリフと共に、法界坊によってもう一度、「おうむ」になぞられて、観客の耳に残る。こういう芝居は、そんな演出に生命がかけられているのである。

その鳥居前で、法界坊が出て来ておくみを葛籠に入れ、通りかかった道具屋市兵衛を身代りに駕に押しこめておく。市兵衛は向うへスッポ抜ける。長九郎が空の駕をかついで入ったあと、市兵衛が土産の桜餅の小さな籠で、「しめこのうさうさ」をもう一度、しぐさまで先刻の駕の時の長九郎と同じに真似るのも面白い。

もう一度大七の奥座敷へ話を戻す。要助が窮地に陥っている所へ、さばき役の甚三が来て、証拠の附け文を、先刻拾った法界坊の附け文とすりかえたのを知らず、法界坊自身、観客席へ見せて歩く所がある。

吉右衛門は「封印切」の忠兵衛でも、こういうしぐさをする。多分に大坂に育った喜劇の持ち味が、この辺に見られる。

甚三が文を読み出す時の、得意そうな法界坊の表情が、段々変わってゆく所は、誰がやっても面白い。歌舞伎以外では、エノケンも、やはりここが圧巻だった。

「法界坊」「法界坊」と呼ばれ、へイと思わず当人が返事をしてしまうギャグは、「ちょいのせ」の善六にもある類

型だが、この前後、逃げ出そうとして「どこへ」「トイレへ」などという入れ事がある。自由なセリフを挿入することが許されているのである。

甚三に打ちさえられた法界坊が、花道で悪態を吐き「大坂弁で、おきなはれ」といい「沖のくらいのに」という唄でかっぱれを踊りながらいる演出は、甚三に命ぜられて丁稚が証文を燭台の火で焼く時に入る手品の合方同様、この芝居の精神を、端的にもの語っている。(寿海が寿美蔵時代の大正四年七月の明治座に演じた「法界坊」の「芝居見たまま」では、「その言い分は、ないわいな」の唄で退場したとある)

次の鳥居前は、前記の駕のくだりがすんで、源右衛門が要助を折檻し、殺しになる。この辺は、東京では、江戸前の殺しのイキで演じる。要助がそのあと、葛籠のおくみとあい、甚三と三人入ると、法界坊が出て来て、「喧嘩だ喧嘩だ」のさわぎにまぎれ、屋台のそばに注文し、小判をふところから落してその上へ坐り「おかわり」といって井を出す幕切れは、菊五郎、吉右衛門それぞれ趣のある演技であった。

三囲の土手下では、前にもいったように、野分姫の落ち入りのあと、穴掘りのある型とない型がある。穴掘りのほかに吉右衛門の時は、土手の上の非人小屋に寝ている法界

坊が落雷で目をさましておりて来るという型で演じる。穴を掘らぬ時は、あらかじめ碑を立てるために掘った穴と説明がついたようである。

甚三が出て一軸をとり戻したために、法界坊に甘んじて侮辱を受けた揚句、眉間を割られてプッとおどろくのは「夏祭」の長町裏と同じ手法だが、法界坊の役柄が喜劇的なので、ニュアンスは大部分ちがっている。

追いまわしで法界坊が自分の掘った穴に落ちる。甚三がその上へ土をかけ、要助おくみを落してやる。野分姫の亡霊が出るので、一軸を見せて退散させる。そこへ法界坊がはい上って、早鉦で立ち廻りになるが、ここでは傘が小道具としてうまく使われる。最後に甚三は法界坊を殺し、花道をゆきかけると、「連理びき」という手法で引きもどされ、舞台へ戻って来る。二代目猿之助はここで宙乗りを見せた。

このあと、甚三の妹のおしづが女船頭になっている隅田川の間があり、「葱売」の浄瑠璃になるわけだが、初代吉右衛門は、文久六年に河竹黙阿弥が改訂した清元を、昭和二年二月の新橋演舞場で復活させて、従来常磐津で演じて来た「双面」に対して、異本をのこした。

花道からセリ出す法界坊・野分姫の霊を合わせて出るこの幽霊は、菊五郎のように、野分姫で出て、切穴の所での

ちに引きぬいて葱売りの姿に変わるのと、はじめから葱売りの姿で出るのとある。勘三郎は近年、前の型を襲用していた。

この役は男と女の性根と声のつかい分けがむずかしい。時には、女の声を後見に出ている別の俳優が、うしろでつける場合もある。

押戻しを出して、いが栗の悪霊に変わるのは、昭和二年九月歌舞伎座の菊五郎所演と、昭和三年二月本郷座の猿之助所演とが、近年での例だが、普通は赤い毛氈を敷いた台に、葱売りの女の姿で主役が上って幕になる。

以上を通じて、永楽屋の主人権左衛門の代りに、後家お楽が出たりすることもあり、野分姫の供につく奴五百平の代りに、侍女五百崎が出たりすることがある。「対面」の朝比奈が女になると同様、その時の一座の俳優の都合で、この範囲の役の変更は、みとめられているのである。

序幕

向島大七だいしち入口の場
同 座敷の場

役名 聖天町の法界坊、道具屋、甚三、永楽屋権左衛門。
手代、要助実まことは吉田松若丸、番頭長九郎、丁稚、弁太。
大坂屋源右衛門、代官、牛島大蔵、道具屋、市兵衛、永
楽屋娘、お組、息女、野分姫、腰元、五百崎、茶見世女、
お浪。

本舞台、平舞台、上手寄りに開き門、これに大七と記した看板かけあり。下手に葭簀張りの茶見世あり。すべて大七入口の体。こゝに代官牛島大蔵、絆織、打裂羽織、大小形にて立ち、町人百姓下手に控えている。黒四天の捕手四人、十手持ち控えている。大拍子の鳴物にて幕あく。

大蔵 コリヤ町人ども、相揃いおるか。

町人 ヘイ／＼、これに揃いおります。

大蔵 申し渡す一条、よく承れ。このたび某が主人赤松則祐殿、吉田の家を仔細あって押領の上、東国の政道を任せらるゝによつて、吉田の公達松若と申す者、町人となり、当地を徘徊なす由、詮議し出さば御褒美を下さる

ぞ。

町一 ヘイ／＼、さようなら、その松若とやらを捕えませば、

町二 アノ、御褒美を下さりまするか。

大蔵 いかにも。中納言冬房の公達松若丸、禁廷より預かる鯉魚の一軸、失いし科によつて、家は断絶、家来もちり／＼、たった一人のせがれ松若、元服なして町家の交わり、その許嫁たる千種中納言が息女野分姫、夫松若のあとを慕い、当地へ参つたとの事。どちらなりとも手柄は仕勝、きつと詮議を致してよからうぞ。

町二 ヘイ／＼、さようなら、男は松若、女は野分姫と申しまするか。

大蔵 オ、サ、からめてなりと、首にしてなりと、かならずぬかるな。

皆々 ヘイ／＼、かしこまってござりまする。

大蔵 某は暫時この所にて、往來の風聞を承らう。

町三 あいにく茶見世の女が。

大蔵 イヤ／＼、かならず気づかいしやるな。

ト床几にかゝる。三味線入りの大拍子になり、向うより大坂屋源右衛門、羽織着流し、町家の旦那のこしらえ、一軸の箱を袂紗に包んで持つてくる。茶見世の女お浪、手桶を下げ戻つて来て、

お浪 あなた、よういらっしやいました。

源右 これはお浪坊、どうだこの頃は。七草ななくさでだいぶ賑やかだの。

お浪 どなたかと存じましたら、旦那様、ようおいでなされました。今日はよいお天気で、土手も人出ひとででござりまする。どうぞおかけなされませ。

ト源右衛門、床几にかゝる。お浪、源右衛門へ茶を出す。

町一 コレ／＼、そっちのお客より、こっちのお役人様へお茶を差しあげぬかいの。

大蔵 イヤ／＼、茶などは及ばぬ事。(ト源右衛門を見て) 才、そちや大坂屋の源右衛門ではないか。

源右 まことにあなたは、牛島大蔵様。

大蔵 イヤよい所で逢うたわえ。何はさておき、かの落人の詮議は、いかゞ致したの。

源右 サア、心あたりもござりませぬが、先達て仰せ越されました、郡領様ぐんりやうの惚れてござる、千種家の息女野分姫。

大蔵 その恋路ゆえ、主人左衛門どの、顔に似合わぬ恋わずらい。

源右 尋ね出してお手に入れ、松若もろとも人知れず。

大蔵 委細は追って沙汰致さん。……コリヤ町人ども、隣

り村へ案内致せ。

町人 かしこまりましてござりまする。

源右 さようなれば、大蔵様。

大蔵 吉左右きさうをば、あい待ちおるぞよ。

ト町人案内に、大蔵、捕手上手へはいる。

源右 ヤレ／＼。ちょっとした話でも、侍というものは堅

苦しいものじゃ。

お浪 ほんにさようでござりまする。

源右 時に、並木の永楽屋の人たちは、まだ見えぬかの。

お浪 ハイ、まだお見えになりませぬが、もう追っつけお見えてござりましょう。まあ一ふく召しあがっていらっしやいまし。

源右 そうか。それでは一ふくやって、待ちあわそう。

お浪 ドレ、お茶を入れて差しあげましょう。

ト向うより権左衛門、商家形かみかた、娘お組、要助、手代形てしろがた、丁稚弁太ていしへんたつき出て、

権左 コレ娘、いつも向島はよい景色じやの。

お組 私やその景色より、早う家へ帰りたいわいなア。

要助 これはしたり、せっかくおいでなされたに、まア花

屋敷へ行つて、七草でも御ろうじませ。

お組 それじゃというて、見とうもないものを。

弁太 ほんに花屋敷より、団子だんごのほうがいいや。

権左 エ、そなた迄そのような事を。サア娘、早うおじや。

お組 私わたくしや後より要助と。

ト傍へ寄ろうとするを、

権左 ハテマア、来やれというに。

ト舞台へ来る。

源右 これはく権左衛門どの、娘御にもようこそく。

サ、これへく。

権左 オ、源右衛門様にはお早い事でござりましたな。

源右 サ、おかけなされませく。

ト皆々床几にかける。

お浪 皆様ようおいでなされました。お一つおあがりなされませ。

ト茶を出す。

源右 時に早速ながら、かねてお頼みの鯉魚リギョの一軸、大家へ売れば大金になる品なれど、たつてのお望みゆえ、私の望みの縁組えんぐみが調った上で、百両でお譲り申すお約束。

今日大七で内祝言ないしうげんの盃をして、一軸をお渡し申す筈なれど、とかく物事は早いがよいゆえ、一軸はこゝでお預け申す。サア改めてお受けとり下され。

ト一軸の箱を渡す。

権左 いやもう不束ふついかな娘をば、さほどの御執心ごじゅうしん。私の方に

もなくてはならぬ鯉魚の一軸、早速お預け下されますとは、ありがとう存じまする。

源右 いま縁談えんだんさえ調えば、簀むすなり舅しゅうなり、そのお礼には及びませぬ。

要助 お組様、お嬉しゅうござりましょう。

お組 エ、知らぬわいなア。

権左 コレ娘、ちゃっと御挨拶しやらぬか。これはしたり、どうしたものじゃぞいの。

お組 それじゃというて。

権左 ハテ、そなたが得心しやらぬと、この一軸は手に入らぬぞや。ごろうじませ、……形かたちばかり大きゅうても、とんと子供でござりまする。コレ要助、こなた、よう改めたがよいぞ。

ト渡す。要助見て、

要助 たしかにこれに相違さういござりませぬ。

権左 オ、そうか。そなたに預けるほどに、大切にかかけましょうぞ。

源右 一軸さえ納まったら、善は急げとやら。では一緒に参ろうか。

権左 まだ番頭の長九郎が見える筈、しばらくこゝで待ちあわせませう。

源右 そんならわしは先へ行き、なにかの支度を。

権左 さようなれば、源右衛門様。

源右 では待っていますぞえ。

ト源右衛門、門へ入る。お浪水を汲みに入る。

権左 コレ娘、なにも案じる事はない。松若様のお家は、

こちらの御恩のお主筋、言わず語らず要助が、かねて望みの、……イヤサ望みで買った鯉魚の一軸、代金さえ済ませば、この縁談の変替えは、又どうでもなる事じゃ。

かならずよく思わぬがよいぞや。コレ要助、この軸はしかとそなたに預けるぞよ。

要助 何から何まで旦那様のお心づかい、この一軸は身にも命にも、サア命にかけて代金は、働きますでござり

ましよう。

お組 こちやどうも心が済まぬわいのう。

トしおれている。この時揚幕にて、

法界 浅草竜泉寺釣鐘の建立、

皆々 お志はござりませぬか。

ト鉦入賑やかな流行唄になり、向うから法界坊、いがぐり天窓に黒衣、きたない勧化坊主にて、奉加帳と竹の矢立を下げ、釣鐘建立の幟を持って出る。講中の婆、男大

勢、鉦をならし、釣鐘を地車へ乗せ、曳いて出て、

一同 なんまいだく。

婆一 コレ／＼法界坊どの、大分くたびれた。七草でも眺

めながら、茶でも一つ呑んで行こうじゃないか。

婆二 ソレ／＼、茶でも水でも呑みたい／＼。

婆三 せめてこゝで、梅干でも含まねば、

婆四 声が枯れて、御詠歌も念仏もよめぬわいの。

婆五 サア／＼、こゝで、

皆々 お茶だく。

法界 これはしたり、また茶を呑むのかいナ。聖天町を曳

き出してからこゝまで、大川橋を越したばかりで、これが二度目だ。貰いといえ、粥の米が三合ばかりに、銭

が三十四文に、雁首が二つに古鏡、これでは釣鐘の建立は出来ぬ。もうちつと流した／＼。

婆一 何を口強情な。この鐘も久しいものだ。

婆二 しかし出家氣質、奇特な事と、

講一 わしらが寄ってこのように、毎日朝から建立に、

講二 歩けど溜まった銭金は、

講三 一体どこへ、

皆々 やらしやったのだ。

法界 ハテ、よく物を思っても見さつしやれ。今の二朱は

八百十二文、米が上がつて百に九合、修行の金も溜まらぬが、愚僧が行力勝れし印には、釣鐘も出来あがり、も

う供養前なれど、鍛冶町の西村へやる金と、鼻の下の喰

う殿建立、鯉の皮の箔代に、阿弥陀も光る鯛のぬた、供

養も近き撞鐘堂、一ツ切り素見し数の子まで、茶漬の菜にやらかせば、金も愚僧が懐には、一夜泊りはしない筈だ。

婆一 いやはや、あきれた道楽和尚だ。

婆二 イヤ、わしらを一日精出さして、女郎買いや肴買いに、つかい果たすとは、まことに興ざめるわいの。

婆三 もうわしらは構わぬ。そんな事で鐘の供養が出来るものか。

講一 これまで勸化に歩いた駄賃に、この釣鐘はわしらが預かって置きましょう。

皆々 オ、そうさっしやれ。

ト皆々怒って行きかける。

法界 ア、コレく。こなさんたちに見放されては、名僧智識の法界坊、願行功德も、ガンといわねばならぬ。あやまったく。

皆々 エ、知らぬわいナ。サアく行きましようく。

ト流行唄になり、講中皆々、鐘を曳いて向うへ入る。

法界 エ、いまくしいな。生きながら三途の川から、上前を取る婆めらだ。

ト言いながら、お組を見て、

浅草竜泉寺釣鐘の建立、お志はござりませぬかな。

トお組要助のかけている床几の真中へ腰をかけ、

お志はござりませぬかな。

トお組へ摺り寄って行くので、お組も要助もびっくりして、

要助 これは滅相な修行者どの。

お組 穢ならしい、こちや厭……要助、おじゃ。

トお組要助は権左衛門の掛けている床几へ行くと、法界坊はそのあとからついて行き、

法界 釣鐘の建立、お志は。

トまた側へ腰をかけ、じりくくと寄って行く。三人、嫌がって一度に立つと、床几は刎ねて、法界坊は尻餅をつく。

アイタ、ゝゝゝ。なんでこの尊い名僧智識の坊さんを、

よく酷い目に逢わしたな。アイタ、ゝゝゝ。

権左 これはしたり。娘がかけていた床几へ、無理に腰かけさっしやるゆえ、気味悪さに退いたれば、床几が傾いて、お前様がお一人でこけたのでござりまするわいの。要助さようでござりまする。いわば怪我の張合、そっちの龜相でござりまする。

法界 エ、やかましいわえ。このありがたい名僧を、酷い目に逢わして、一人でこけたで事が済むと思うか。相手というは、その美しいお娘、おれが腰を打っただけ、お娘を酷い目に逢わそうか。サア。

要助 料簡すれば、方図^{ほうず}のない。

法界 エ、どきやがれ。

トお組を捕えようとするを、權左衛門要助支えて、ト三人、門内へ入る。法界坊追おうとする。出逢頭^{でうがしら}に、以前の大蔵出て、鉢合わせ、

大蔵 アイタ、、、、目から火が出た。

法界 なんだ、目から火が出る。その火で煙草を。

大蔵 ヤ、そちゃ法界坊ではないか。

法界 あなたは、牛島大蔵様。

大蔵 よい所で出逢うた。シテ、かねて其方^{そのほう}へ申しつけし、落人松若の詮議はどうじゃ。

法界 お氣づかいなされますな。おおかた詮議の綱に取りつきました。

大蔵 シテ、その様子は。

法界 まずお耳を、

トさゝやく。

大蔵 オ、でかした／＼。まだその上に、彼奴^{きやつ}が許嫁の野分姫も、どうやらこの地へ参りし噂。まった松若預かりの鯉魚の一軸、当地にありとの風聞、何分ともにぬからぬよう、心得たか。

法界 ハテ、訴人するか手に入れるか、仕負^{しお}おせれば金の蔓^{つる}、油断してつまるものでござりまするか。

大蔵 イヤ、小気味のよい坊主だ。手がかりあらば、身の屋敷まで。

法界 のちほど参上致しまする。

大蔵 しからは御坊^{ごぼう}。

法界 大蔵様。

大蔵 かならずともにぬかるまいぞ。家来、参れ。

ト大蔵、家来を連れ入る。門の内より長九郎、番頭のこしらえにて、出かゝりいる。

法界 サア／＼、うまいぞ／＼。何でもあの二才め、おれが目にとまったが最後、見出したら褒美をズッシリ、姫といひ一軸といひ、どっちにしても金づくめ、……オ、寒い、惣身^{そうみ}が金で冷えるようだ。

ト長九郎、肩を叩き、

長九 コレ法界坊、うまい話だな。

法界 ヤ、これは番頭さん。最前からの様子をば。

長九 後で残らず聞いていたが、ちよっとおれも相談したい事がある。

法界 いやもう、金にさえなる事なら、やらす通さず何なりと。

長九 ハテ、欲気^{よくけ}の多い和尚であるわえ。

法界 そこが当世^{とうせい}でござんす。シテその荒筋は。

長九 コレ、高うは言われぬ、コウ／＼。